



大手前大学
大手前短期大学リポジトリ

Laura Ingalls Wilder の Little House シリーズ におけるキルトの役割

著者	宮崎 弓佳里
雑誌名	大手前大学論集
巻	19
ページ	265-278
発行年	2019-08-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1160/00001981/



Laura Ingalls Wilder の *Little House* シリーズにおけるキルトの役割

宮 崎 弓佳里*

要 旨

従来テキスタイルアートの分野であるキルトは、文学においては女性の忍耐、勤勉、および家事労働の観点から、主としてフェミニズム的な捉えられ方をされてきた。このアメリカ小説におけるキルトを別の側面から捉え直す試みのひとつとして、本論では西部開拓時代の日常生活を描いた Laura Ingalls Wilder の *Little House* シリーズを取り上げる。本来キルトは、防寒と装飾を兼ね備えた万能な生活用品のひとつである。しかし、Wilder が描く西部開拓時代に使われたキルトの描写には色彩の要素が省かれている。キルトが重要な防寒用品であり、さらには家の扉にさえもせざるをえなかった開拓時代を描く際のキルトの役割、および表現を、キルトが持つ暖かさや心地よさといった感触表現に着目し、身体論の観点から考察したい。

キーワード：アメリカン・キルト、Laura Ingalls Wilder、西部開拓時代、生活用品、身体表現

はじめに

キルトとは、上布・中敷き・裏布の三層を刺し縫いした薄い掛け布団である。The *Oxford English Dictionary* によると、キルトという言葉は詰め物を入れた袋、マットレス、クッションを意味するラテン語からきており、古フランス語 *cuilte* に由来する¹⁾。発生は不明であるものの、キルトの技法の起源は数千年前のアジア地域とされ、11世紀から13世紀にかけて十字軍によってヨーロッパ大陸に伝えられ²⁾、「保温と保

*大手前大学大学院博士後期課程

護の機能を果たした安全でかつ美し³⁾さを施すものとして、キルティングの技法が家庭の衣類や寝具作りにも広まっていった⁴⁾。一方、パッチワークとは、小さな布を縫い足して一枚物の大きな布にすることをいう。布が大変貴重だった時代に編み出された技法であるが、この技法も古くからみられ、紀元前11世紀のエジプト、1200年前の中国からパッチワークの技法を用いた布が出土している⁵⁾。これらのふたつの技法を組合せ、上布にパッチワークをした布を使用するのがパッチワーク・キルトである。

キルトがヨーロッパ大陸からアメリカに伝わったのは、17世紀の植民地時代である。アメリカでは、一枚布にキルティングを施した物、アップリケの手法を施した物もキルトと呼ばれているが、現在ではキルトはベットカバーの総称となっており、アメリカン・キルトとは三角や四角といった幾何学図形に切った小さな布を縫いつなげたものを上布に使用するパッチワーク・キルトをさす⁶⁾。アメリカン・キルト（以下キルト）の大きな特徴として、キルトのパターンに自然、宗教、生活用品などと関連のある名前がついている点があげられる⁷⁾。パターンは布の色彩の配置の組み合わせによって決められており、その数は「古いオリジナルなものは300くらい、アレンジメントが加わって何千⁸⁾」とあるといわれている。今日では、フォークアート、さらにはテキスタイルアートとしてその芸術性が人々に受け入れられている。

このように、キルトはこれまでテキスタイルアートとして、工芸史、美術史の分野で研究されてきた。文学においても、キルトは生活用品として時代の生活感を表現する小道具として随所に使われてきたが、文学の表象として取り上げられ始めたのは1980年代のフェミニズムの台頭からである。キルトは、特に物資の乏しかったアメリカの植民地時代から西部開拓時代にかけて、自宅で家族の服を作る際に出た残り布の切れ端をつなぎ合わせて作られ、その細かい手作業は女性にゆだねられており、ジェンダーとしての女性に強い家事労働を描く小道具としてフェミニズムの考えの中で着目されたのであった⁹⁾。現在も文学におけるキルトは、フェミニズムの視点で考えられることが大半である。

本論では、このアメリカン・キルトを、アメリカの児童文学作家 Laura Ingalls Wilder (1867~1957) が自らの子ども時代の開拓地での生活をもとに描いた作品の中にみていく。Wilder の作品は、5歳から18歳へと成長していく主人公 Laura の視点を主に用いて、Ingalls 一家の開拓地での日常生活を描いた自叙伝的な長編作品である。これらは *Little House* シリーズ¹⁰⁾ と呼ばれ、「正統派大河小説」¹¹⁾ として長きにわたり、アメリカはもとより日本においても愛読されている。

これまでの Wilder の先行研究では、作者の実体験と虚構との切り分け、人種差別表現の有無、作者は誰かといった問題が主として論じられてきた¹²⁾。しかし、キルトの役割にまで言及したものは少なく、その際も家政学の観点から生活様式や文化を研

究する中で Wilder の作品を資料として取り上げ、キルト作りは母から娘に対するしつけの一環としての針仕事であり¹³⁾、しかも、「上手、下手にかかわらずこなさなければいけない主婦の仕事」¹⁴⁾、つまり女性の仕事としてフェミニズムの枠で論じられている。また、後の作家、例えば Toni Morrison (1931~) の *Beloved* (1987) にみられるような、キルトにアイデンティティの投影やシンボルをみていくといった意味合いもみられない。しかし、Wilder のキルトは、単に西部開拓時代の生活感を浮かび上がらせる小道具に留まっただけではない。キルトは何度も描かれながら、日常生活に違和感なく溶け込み、心地よさを醸し出す特別な役割を表象しているのである。

本論では、*Little House* シリーズにおけるアートではなく生活用品としてのキルトを、フェミニズムとは切り離し、生活用品としての肌触りという点に着目しつつ、皮膚感覚、感触、感性概念、そして身体性という観点から考察していきたい。

1. 感触として描かれるキルト

まず、この *Little House* シリーズで描かれているキルトを、物資の乏しい西部開拓時代において日常的に使用する生活用品として考察していく。ここで取り上げる生活用品とは、労働に明け暮れる日常の生活で使われる、贅沢品とは異なる、生活に欠かせない品物と考える。西部開拓時代、人々は乏しい物資の中で必要最小限の物を使い、工夫をして生活をするしかなかった。家族の服を作った際に出る小さな布切れをつなぎ合わせたキルトは、防寒のための寝具として重要な役割を担っていたのである。また、キルトは幌馬車での移動時にはこわれやすい食器類のためのクッション材となり、死者の埋葬時にも使われていた¹⁵⁾。さらに、開拓地に到着してからは「厳しい気候から身を守るためや、粗末な家を飾るために使われ」¹⁶⁾、「粗末な小屋を少しでも家庭らしくしようと、いろいろ手を加え」¹⁷⁾ るために使われたのがキルトであった。つまり、キルトとは本来寝具であるものの、防寒と装飾など様々な用途を兼ね備えていた万能な生活用品であったといえる。

Wilder も同様に、寝具としてはもちろんのこと、橇に乗る際、および寒い部屋からストーブのある部屋までの移動時の防寒具、丸太小屋の扉代わり、屋外での敷物、ならびに馬車で楽器を運ぶ際のクッション材などの用途でキルトを描いている。*Little House* シリーズの特徴として、西部開拓時代の生活を細部にわたり描いている点があげられる。それは、*Little House* シリーズを書き上げる以前、Wilder が自身の2歳から18歳までの出来事を、1人称を用いてまとめた *Pioneer Girl* を出版社に売り込む過程で、Alfred A. Knopf 社から「開拓者たちの日常生活の詳細について書き、食物、衣服、ゲーム、弾丸の鑄造などについても触れてほしいとの提案」¹⁸⁾ を受け書

き加えたためである。*Pioneer Girl*には、キルトについての記述はログキャビンの戸ができるまでの間、キルトを玄関の扉代わりにしていた場面に1ヶ所のみ掲載されているだけである¹⁹⁾。また、縫物や編み物をする描写が、キルトを縫う描写に数多く変更、あるいは追加されている²⁰⁾。このため、Wilderにとり「開拓者たちの日常生活の詳細」を書くために必要な生活用品のひとつがキルトであったと考えられる。

次に、生活用品であるキルトが*Little House*シリーズの中で、どのように感触として描かれているのかを考察する。Wilderの研究者であるPamela Smith Hillが指摘するように、“warm”、“snug”、“cosy”などの心地よさをあらわす言葉は*Little House*シリーズの「特徴」(“hallmark”)²¹⁾である。この心地よさはキルトの描写にもあらわれている。以下は、夜中に寒さで目を覚ましたLauraが母にキルトを掛けてもらう描写である。

That night Laura woke up, shivering. The bed-covers felt thin, and her nose was icy cold. Ma was tucking another quilt over her.

“Snuggle close to Mary,” Ma said, “and you’ll get warm.”

(BW118) (下線筆者、以下同じ)

季節は寒さが戻った春先であり、Lauraは6歳である。掛布団から出ていた鼻が凍えるほど冷たくなったため、目が覚めたのだった。Lauraがすでに掛けていたのは“the bed-covers”になってはいるものの、この後母が掛けてくれるのが“another quilt”と別のキルトを示す“another”が使われていることから、このベットカバーとはキルトのことだといえる。

この時の寒さは、何枚も重ねてあったキルトでは暖かさが十分ではなく「うすいと感じた」(“felt thin”)と描写されているが、すでに掛かっている数枚のキルトでは十分に暖かくなるとキルトを用いて描写することで、この夜の厳しい寒さをあらわしている。「メアりにすり寄りなさい」(“snuggle close to Mary”) で用いている“snuggle”とは、ぬくもりや心地よさを求めてすり寄ることである。一緒に寝ている姉のMaryにすり寄り、人肌という感触で自らが「暖くなる」(“get warm”)という行為を、母はLauraに促しているのである。また、母がLauraにもう1枚キルトを掛けてやる描写では、「心地よくキルトで包み込む」ことを意味する“tucking”と“over”を用いたことで、暖かさだけでなく、母の愛情深さをも示す描写となっている。

このように、冬の寒さとキルトとを関連付ける描写は、長く厳しい冬の出来事を描いた*The Long Winter*に数多くみられる。例えば、以下の猛吹雪の夜に、14歳になっ

ている Laura が怖い夢を見て目が覚める描写があげられる。

Then she was staring at the dark, but for a long time that nightmare held stiff and cold... At last she was able to move. So cold that the dream still seemed half real, she snuggled close to Mary and pulled the quilts over her head.

“What is it?” Mary murmured in her sleep.

“A blizzard,” Laura answered. (LW 138)

Laura は猛吹雪に襲われる夢を見ていたのだったが、実際に外は猛吹雪であった。先の描写と同様に、ぬくもりを求めて「メアリにすりよった」(“snuggled close to Mary”)ものの、まだ「怖い夢」を見ているような気持ちになっていた。さらに、Laura は「キルトを頭からすっぽりとかぶった」(“pulled the quilts over her head”)といった動作をするのであった。これは、身体が「こわばり、寒い」(“stiff and cold”)のを和らげるというキルトが持つ暖かさを求めるためだけではない。キルトをすっぽりとかぶることで得られる安心感も、感触的な表現によって描かれているのである。

これらの描写では、キルトは心地よさ、暖かさ、安心感を得るために用いられているが、以下のように異なる使い方をしている場合もある。人々が越冬の準備も終えていない10月に、突然の吹雪が開拓地に建つ簡単な造りの「開拓小屋」(“shanty”)を襲った翌朝の描写である。

Laura’s nose was cold. Only her nose was outside the quilts that she was huddled under....

He [i.e. Pa] had kindled the fire. It was roaring in the stove, but the air was freezing cold. Ice crackled on the quilt where leaking rain had fallen. Winds howled around the shanty and from the roof and all the walls came a sound of scouring.

Carrie sleepily asked, “What is it?”

“It’s a blizzard,” Laura told her. “You and Mary stay under the covers.”

Careful not to let the cold get under the quilts, she crawled out of the warm bed. (LW 37-38)

朝食を準備する母の手伝いをするために起きなくてはいけないのだが、寒さのために「暖かいベッド」(“the warm bed”)から出られない Laura の様子を描いた描写である。Laura の状態を示す “huddle” とは、寒さのために丸く縮こまることを意味する。

「寒さがキルトの中に入らないように気を付けて」(“[c]areful not to let the cold get under the quilts”)、しかも「這うようにして暖かなベッドから出た」(“crawled out of the warm bed”)のは、一緒に寝ている姉の Mary と妹の Carrie に対しての気遣いのあらわれである。

このように、キルトは外の寒さを遮り、内部にぬくもりの空間を作り出す役割を果たしているといえる。キルトが暖かいと感じるのは、寝ている3人の体温からであろう。寒さが厳しければ厳しいほど、キルトのぬくもりが心地よいものとして描かれているのである。しかし、そのキルトは簡単な造りの屋根から漏った雨が染み込み、なおかつ、寒さで一番上に掛けていたキルトが凍ってしまっていたのだ。その凍り具合も、「バリバリと音を立てて砕ける」(“crackled”)ほどであった。この描写は、本来暖かさや心地よさを与えるキルトとは異なる表現である。だが、凍ったキルトの描写を入れることにより、キルトの外側が凍るほどの室内の厳しい寒さと、凍っていない2枚目以降のキルトが内部に作り出す空間の心地よさとの落差が明確になっている。

Little House シリーズのタイトルにもあらわれているとおり、Wilder は Ingalls 一家が移り住む家をすべて小さな家として描いた。しかし、これらの家は小さいながらも厳しい気候や野生生物から身を守るといふ建物としての重要性だけではなく、「肉体的にも感情的にも暖かさと快適さ」(“warmth and comfort, both physical and emotional”)²²⁾をもたらしめている。自然の脅威を家の壁によって遮断することで、室内の心地よさを形成させているのである。同様の役割をしているのが、キルトであると考えられる。日常的に掛け布団として使われるキルトは、家の壁だけでは守り切れない寒さを遮り、内部に *Little House* シリーズの特徴である “warm”、“snug”、“cosy” といった心地よさを形成しているのである。このように、キルトは寒さの厳しい西部において、外の寒さと中のぬくもりとを対照させる感性的な表現で描かれているといえる。

2. 色彩の描写がないキルト

次に、*Little House* シリーズにおけるキルトの特徴として、キルトの色彩に関する記述がまったくないという点に着目したい。

これまでみてきたとおり、Wilder は *Little House* シリーズの中で数多くキルトを描いているものの、色彩に関しては、両親の留守中に Laura が大掃除を終えて整った部屋を見る場面で「明るい色のキルト」(“bright quilts”) (*LTOP* 119) と一度描写されるだけであり、それがどのような色彩のキルトなのかについては一切触れていな

い。また、アメリカン・キルトの特徴であるパターンの名前についても、「ナインパッチ」(“nine-patch”)²³⁾、「クマの足跡」(“bears truck”)²⁴⁾、「窓辺の鳩」(“Dove-in the window”)²⁵⁾のように3種類の名があげられているのみであり、他のキルトの上布のパターン名がどのようなものであったのかは描かれていない。さらに、これらのパターン名が表記されているキルトについても色彩は一切示されていない。つまり、Wilder はキルトの描写に、本来キルトが持つ重要な構成要素であるはずの色彩という美的観点を省いたことになる。

Wilder はキルトの描写とは対照的に、登場人物の服装の色彩を布の色彩や柄だけではなく素材も具体的に描写している²⁶⁾。しかし、これらの描写をみていくと、そのほとんどが開拓地から町への外出、教会の出席、パーティー、クリスマス、結婚といった特別な日、日常に対する非日常に着る晴れ着の描写に限られている。Laura が家族と初めて町へ行く場面では、“...she [i.e. Ma] helped them [i.e. Mary and Laura] put on their best dresses—Mary’s china-blue calico and Laura’s dark red calico” (BW 161) というように、服の布の色彩と素材が描写されている。人里離れた奥深い森に住んでいる Laura にとり、町とは父が毛皮を売りに行き、それと引き換えに砂糖、布地など生活に必要な物を購入してくる特別な場所であった。その町への外出という、特別な非日常的な日に着る特別な「彼女たちの一番いい服」(“their best dresses”)の描写だからこそ、Wilder は詳細な色彩の描写を行ったのである。

Little House シリーズで描かれる19世紀後半、特に開拓地では、服作りは女性が行う家事のひとつであった。当時布は非常に貴重だったため、服を作った際に出る布の切れ端は“scrap bag”と呼ばれる袋に大切にためておかれたのだった。*Little House* シリーズの中でも、母が Grace のために小さなコートを縫うのに用いた布は、“scrap bag”の中にあった「かつて母の一番いい冬用のドレスだった、やわらかい青色のウールの布地」(“a large piece of soft blue woolen cloth, that had once been her best winter dress”) (SL 177) であった。このため、キルトも同様に“scrap bag”の中にあった「彼女たちの一番いい服」の端切れで作ったはずである。しかし、開拓時代の生活用品としてのキルトの描写の場合、色彩の美しさは重要な要素ではないため、色彩表現はあえて用いず、外部の寒さを遮り暖かく心地よい空間を作り上げる防寒具として、視覚表現ではなく感触によって表現されているのである。

姉妹がキルトを縫う描写は、特に外で遊ぶのが好きな Laura に対し、室内で縫物をするのが好きな Mary との対比で描かれている。その Mary が病気の後遺症から盲目になった後も、これまでと同じようにキルトを縫えるようになった様子は、“Mary was learning to sew without seeing; her sensitive fingers could hem nicely, and she could sew quilt-patches if the colors were matched for her” (SL 92) と描かれている。

Mary は「見ることなく」(“without seeing”) と、視覚を用いることなく縫物ができるようにになっていたのだった。視覚が遮断されたために一層鋭敏になった指先の感覚に集中し、Mary が「器用な指先」(“sensitive fingers”) で、縁かがりといった正確な縫い目を必要とする細かい縫物を丁寧にする様子が描かれている。

しかし、キルトの場合、布の色彩の配置を考慮する必要がある。Mary は手の触感を通してキルトに色があることを連想し、キルトも縫い上げていったのであろう。視覚を失った Mary には色彩は関係ない。それよりも指先の触感が重要なのである。目に頼らずに指先の触感に意識を集中させることでキルトを完成させていく可能性を示唆したこの描写は、まさに色彩を描かずに感知的に心地よい肌触りを提供するキルトの製作過程においてふさわしいと考える。

Wilder の描くキルトにアメリカン・キルトの特徴である色彩が用いられていないのは、この時代のキルトがまだ色彩やアート重視ではなく、実用的な生活用品として、キルトの本来の特性である防寒具という役割を全面的に押し出した結果であり、色彩の美しさよりも暖かさや心地よい肌触りこそが重要であった開拓時代を反映させているといえる。

3. 心の問題とキルト

生活用品として暖かさ、心地よさを得るために用いられているキルトではあるが、次に、すさんだ生活状況にある登場人物には、キルトの持つ心地よさが反映されることはない描写を考察する。

Little House シリーズの中で、キルトを防寒具として身にまとっている描写に描かれている人物は4人である。Laura は川に落ちてずぶ濡れになって帰宅した際、母にタオルで体を拭いてもらった後にキルトを掛けてもらっている (PC 105)。Grace は寒さの厳しい朝の描写の中で、ぬくもりが残るキルトに包まれ暖かい部屋へと抱いて連れて行ってもらっている (LW 97, 197)。また、Mary は猩紅熱の後遺症から失明したものの、キルトに包まれてロッキングチェアに毅然とした姿勢で座っている (SL 2)。この3人についての描写は、先に述べた *Little House* シリーズの「特徴」である心地よさが符合している。しかし、様々な家族が登場する *Little House* シリーズの中でも、Laura が真冬の2か月間家を離れて開拓地で教師をするために下宿をしたのが、「機能不全に陥っている家族で、最も忘れがたい例」 (“[t]he most memorable example of a dysfunctional family”)²⁷⁾ である Brewster の家族であり、この家の描写にはキルトが持つ心地よさが反映されていない。Mrs. Brewster がキルトに包まれて座っている場面は、以下のように描かれている。

It was a long, wretched day. Mrs. Brewster sat huddled in a quilt, close to the stove, and sullenly brooding... Laura did the dishes, made her bed in the freezing cold, and studied her schoolbooks. When she tried to talk, there was something menacing in Mrs. Brewster's silence. (HGY 64)

Mr. Brewster は妻と小さな息子と 3 人で、町から 12 マイル離れた開拓地に住んでいる。Mrs. Brewster は東部から来ており、厳しい冬の開拓地での生活に疲れ果てている。家の造りは粗末なうえ、ストーブが唯一の暖房器具だった。Mrs. Brewster は、キルトを掛けて「縮こまって」(“huddled”) ストーブのすぐ近くに「むっつりと気がめいつている」(“sullenly brooding”) 様子で座っている。しかも、Laura が話しかけられないほど、Mrs. Brewster は「何か恐ろしげな」(“something menacing”) 雰囲気を持っていたのである。その恐ろしげな雰囲気は、真夜中に Mrs. Brewster が肉切り包丁を持って夫を脅し、東部へ帰ると訴えている姿をカーテンの隙間から Laura が目撃する場面へと続く。この場面について Wilder の研究者である John E. Miller と Hill がそれぞれ、“one memorable scene”²⁸⁾、“the most disturbing scenes of the series”²⁹⁾ と述べているとおり、*Little House* シリーズの中で読者に強い印象を与える場面である。このように強烈な印象を与える Mrs. Brewster が、キルトを掛けている点に着目したい。

Mrs. Brewster について、Miller は “Lib Brewster seems to have been a classic example of homesteader wife dragged out to the frontier by her husband against her will and totally unable to adjust”³⁰⁾ と述べ、Mrs. Brewster の例は当時珍しくはなかったことを指摘しているが、彼女がもともとは家事能力もある思いやりのある女性であるのは、Mrs. Brewster が作った「料理は美味しい」(“[t] he food was good”) (HGY 7) と Laura は感じ、また、夫が凍傷になった時には「まるで別人のように」(“she seemed like another woman”) (HGY 63) 献身的に夫の世話をする行動から伺える。しかし、真夜中に肉切り包丁を持ち出して夫を脅す行為を行うのは、明らかに精神に異常をきたしている。

また、Brewster の開拓小屋で Laura にあてがわれたのは、ひとつの部屋をカーテンで仕切っただけの小さな空間ではあったが、そこに用意されていたのは羽毛が入った枕とシーツと「沢山のキルト」(“plenty of quilts”) (HGY 10) であった。つまり、Brewster の家にある小さなストーブだけでは粗末な造りの開拓小屋を暖めるには十分ではないものの、肉体を暖める防寒具としてのキルトは十分にあったのだった。しかし、黙り込んでストーブの前で縮こまって座っている Mrs. Brewster が孤独と絶望感という精神状態であるため、かえって粗末な造りの開拓小屋の寒さが強調され、キ

ルトの持つ暖かさや充足感が描写に反映されることはない。

Little House シリーズの中で Ingalls 家は、「どんな苦境にあっても工夫し機転をきかせ、決して諦めない不屈の精神とそれを支える楽天性、そして愛と絆で結ばれた理想の家族像」³¹⁾ として描かれているのに対し、Brewster の家は機能不全に陥っている家族である。このふたつの家族の違いは、Laura が Brewster の家から週末に自宅に戻った時に聞く、母の「こちよく低い声」(“pleasant low voice”) (HGY 35) の話し方と、Mrs. Brewster の「けんか腰に早口」(“angrily and very fast”) (HGY 10) での話し方の違いにもあらわれているが、興味深いのは、いずれの場面も Laura はキルトをかぶった状態で聞いていることである。つまり、Brewster の家で使われるキルトを用いた描写には、これまでみてきたような “warm”、“snug”、“cosy” といった心地よさはまったく反映されていないことになる。

すでに述べたように、Ingalls 一家が移り住む家は、肉体的にも感情的にも暖かさと快適さをもたらす物として描かれている。暖かい家族のつながりがあれば、肉体的な暖かさのみならず、心も温かくなるのである。同様に、キルトは寒さを防ぐ生活用品であり、キルト自体に心までを暖めることはできない。それは、キルトは身体的には外の寒さを遮り内部にぬくもりの空間を作り出すが、キルトで身を包む人物と包まれる人物との良好な人間関係があるからこそ、キルトは心も暖めるからである。このため、キルトを用いた表現は身体表現に限られているということを、Mrs. Brewster の例は示しているといえる。

4. 扉代わりに使われたキルト

キルトは、防寒具という役割においては十分に機能を果たすものの、本来の目的以外で用いられる場合にはその脆弱性を露呈することもある。最後に、丸太小屋の扉代わりとなり、「Ingalls 一家とオオカミを隔てたキルト」(“a quilt between them [i.e. the Ingalls] and the wolves”) (LHOP 100) の描写から、戸口に掛けられたキルトによって視覚が遮断されたことにより、外の世界の恐怖が気配と臨場感で伝えられている描写を考察する。

Ingalls 一家は、幌馬車で移動しながら各地でキャンプをする生活を続けた後、父が未開の草原地帯であるカンザス州のインディアン・テリトリーに丸太小屋を建てた。丸太小屋は建てたものの、扉を作る時間がなかった。それは、オオカミなどの野生生物から馬を守るため、先に馬小屋を造る必要があったからであった。そこで、扉代わりに父が用いたのがキルトであったのだ。先述の *Pioneer Girl* の中で描かれるキルトの描写も同じ場面である。

頑丈な壁のある家の中は、たとえオオカミの遠吠えが遠くに聞こえようとも、「心地よさと安心」(“snug and safe”) (LHOP 79) を提供してくれるはずであった。しかし、馬で遠出をした父は、50匹ほどのオオカミの群れに遭遇していた。その夜、扉の代わりにキルトが掛けてあるだけの戸口から、そのオオカミの大群が襲ってくるかもしれないという Laura の不安な心情を描いているのが、以下の描写である。

In the dark Pa’s arm came from behind the quilt in the doorway and quietly took away his gun.... “The house was safe, but it did not feel safe because Pa’s gun was not over the door and there was no door; there was only the quilt.”

(LHOP 94)

母が外で夕食の片付けをする音でさえも響いて聞こえてくるほど静まり返った夜、オオカミを警戒して外で寝ずの番をしていた父が、戸口の上に掛けてある銃を取ったのだった。その取り方が「キルトの隙間から腕を出した」(“Pa’s arm came from behind the quilt in the doorway”) とあるのは、父がたえず外を警戒する必要があるからであった。また、「父の銃は戸口のところに掛けられていない」(“Pa’s gun was not over the door”) のは、危険から家族を守るために父が銃を持っている、つまり、いよいよオオカミが襲ってくる危険が差し迫っていることを示している。しかも、「静かに」(“quietly”) としたことで、父の緊張感が伝わる描写となっている。そして、その戸口には「扉はない」(“there was no door”) のである。さらに、「キルトだけしかない」(“there was only the quilt”) と続けることで、恐怖感をあおる描写となっている。

このキルトは、父がキルトを扉代わりにした際も、玄関のためにあけた「細長い穴」(“tall hole”) (LHOP 64) の上に吊るしただけであった (“Pa hung a quilt over the door hole.”) (LHOP 78)。先のキルトの隙間から父が銃を取るために腕を伸ばした描写にもあるように、キルトは容易に持ち上げられる物として描かれている。また、母がキルトを持ち上げて室内に入る様子も、「母はキルトを持ちあげました」(“she [i.e. Ma] lifted the quilt”) (LHOP 78)、(“Ma lifted the quilt”) (LHOP 94) と描写されるとおり、キルトは女性の母の手でも簡単に持ち上げられるほどの軽さしかない物として描かれている。このように、軽い1枚のキルトが四隅を固定されることなく吊されているだけではオオカミが入ってきてしまう可能性があることを示唆することで、建物としては「安全」(“safe”) であるはずの頑丈な壁で囲まれた家が脅かされることからわき起こる Laura の「不安な心情」(“not feel safe”) が、短文ながらも臨場感をもって描かれている。

また、オオカミが家のすぐそばにいる気配は、番犬 Jack の行動にもあらわされている。Jack が細心の注意を払っているのが、扉代わりに掛けてあるキルトの前であった。この時の Jack の様子は、「ジャックは、戸口のキルトめがけて、歯をむいてうなっていました」(“Jack growled and showed his teeth at the quilt in the doorway”) (LHOP 95)、「ジャックは、戸口に下げてあるキルトの前を、やすみなく行ったり来たりし続けていました」(“Jack did not stop pacing up and down before the quilt that hung in the doorway”) (LHOP 98) と、それぞれ「戸口にあるキルト」とオオカミの気配を察知する Jack の警戒する動きとを関連付けて描いている。その結果、一番危険な場所は戸口に掛けてあるキルトの前だと示す描写となり、緊迫した状況を読み手に伝えている。

キルトは生活用品としては万能であり、掛け布団として本来の役割で使われる際は身体的に心地よさをもたらす。しかし、四方を固定されることなく戸口に吊るされただけのキルトでは、扉の代用品として家族をオオカミから守るには脆弱である。「扉がないよりも 1 枚のキルトが掛っていた方がまだ安心」(“[t]he quilt would be better than no door”) (LHOP 78) ではあるものの、戸口には扉ではなく布製のキルトが 1 枚掛かっているだけであり、さらに番犬 Jack の動きをもって不安を強調した。キルトは本来、その柔らかな感触と外の寒さを遮ることで暖かい内部の心地よさを伝えてきた。しかし、この場面では、内部を脅かす外の危険な気配がキルトにより視覚が遮断されることにより、緊張したひと晩が聴覚と皮膚感覚として鮮明に表現されているのである。

おわりに

この論文は、Wilder の *Little House* シリーズにおけるキルトの描写から、これまでアメリカ文学の中では西部開拓時代の時代性を描き出す単なる家具や小道具の一部として、また女性の家事労働として以上には取り上げられなかったキルトを、キルトが持つ肌触りやぬくもりという身体感覚で捉え直す試みである。

以上述べてきたように、Wilder の描くキルトは、内部のぬくもりとは対照的に外側が凍るほどの外の寒さを浮き彫りにする。さらに、キルトをたくし込み、子供たちをくるむ母の手と、ひとりではなく姉と一緒に 1 枚のキルトにくるみ込まれることで、単なる温度の問題のみならず、ぬくもりが家族の気遣いや家族のつながりへと拡大されている。開拓地で荒んだ生活を送る Brewster 家は、本来肉体を暖めるべき防寒具であるキルトが、暖かさや心地よさの反映として描かれていないのとは対照的である。また、キルトの特徴である美しさや豊かな色彩といった側面が省かれること

で、キルトが持つ心地よい肌触りといった触感が一層強調されている。そして、扉代わりのキルト1枚で戸外と区切られた室内空間では、外にいるオオカミの危険性を臨場感を持って伝えることで、屋内と戸外との関係の緊張感が身体感覚として表象されている。

視覚中心主義とは西欧近代の伝統ではあるが、Wilder が描いた生活用品としてのキルトを、視覚による説明表現ではなく身体論的に皮膚感覚で捉えることにより、説明表現ではあらわすことができない人間が感じる肌触り、ぬくもり、心地よさ、さらには危険な開拓地での緊張感までもが *Little House* シリーズでは伝えられているといえる。これがここで考察した、文学を通して描き出されるキルトの役割のひとつであると考えられる。

本論では、生活用品としてのキルトを感触という身体的表現から考察したが、キルトにおける部分と全体との関係、さらにそこへの自己投影のあり方などへ今後考察を広げていくことで、文学におけるキルトの多様な役割とその全体像を考察していきたい。

注

テキストは Harper Trophy、1971版を用いた。作品の省略記号については、Pamela Smith Hill に準拠する。本文中の引用は、() 内に省略記号およびページ数をもって示す。

<i>Little House in the Big Woods</i> (1932)	BW
<i>Little House on the Prairie</i> (1935)	LHOP
<i>On the Banks of Plum Creek</i> (1937)	PC
<i>By the Shores of Silver Lake</i> (1939)	SL
<i>The Long Winter</i> (1940)	LW
<i>Little Town on the Prairie</i> (1941)	LTOP
<i>These Happy Golden Years</i> (1943)	HGY

- 1) 北村哲郎、伊藤紀之、玉田真紀、小林恵『共立女子大学所蔵アメリカン・アンティークキルトコレクション』(日本ヴォーグ社、1992) 153.
- 2) 小林恵『アメリカン・パッチワークキルト事典』(文化出版局、1983) 12.
- 3) ジャクリース・M.アトキンズ、成田明美訳『キルティング・トランスフォームド：現代アメリカンキルトの歴史を作った人々』(日本ヴォーグ社、2007) 4.
- 4) 同上.
- 5) キャロライン・クラブトゥリー、クリスティーン・ショー、福井正子訳『世界のキルト文化図鑑：様々な布と民族の手仕事』(柘風舎、2008) 9.
- 6) 小林恵『アメリカン・パッチワークキルト事典』(文化出版局、1983) 11、204.
- 7) 北村哲郎、伊藤紀之、玉田真紀、小林恵『共立女子大学所蔵アメリカン・アンティークキルトコレクション』(日本ヴォーグ社、1992) 128.

- 8) 同上.
- 9) E. ショウォールター、佐藤弘子訳『姉妹の選択 アメリカ女性文学の伝統と変化』(みすず書房、1996) 223-24.
- 10) 本論で研究対象としたのは、Wilder の存命中に出版され、Laura を主人公とする7作品であり、ここでいう *Little House* シリーズはこれらを指すこととする。
- 11) レオナード・S・マーカス、前沢明枝監訳、おおつかのりこ、児玉敦子訳『アメリカ児童文学の歴史』(原書房、2015) 307.
- 12) Pamela Smith Hill *Laura Ingalls Wilder: A Writer's Life* (South Dakota State Historical Society Press, 2007).
John E. Miller *Becoming of Laura Ingalls Wilder: The Woman Behind the Legend* (University of Missouri Press, 1998).
Laura Ingalls Wilder *Pioneer Girl: The Annotated Autobiography*, Pamela Smith Hill, ed. (South Dakota Historical Society Press, 2014).
- 13) 玉田真紀「アメリカン・キルトの基礎研究 (V)」『共立女子大学家政学部紀要40』(共立女子大学、1994) 33.
- 14) 武田京子「インガルス一家の物語」『教育工学研究11』(岩手大学教育学部附属教育実践総合センター、1989) 83.
- 15) バット・フェレオ、小林恵、悦子・シガペナー訳『ハーツアンドハンズ—アメリカ社会における女性とキルトの影響』(日本ヴォーグ社、1990) 54.
- 16) 同上、57.
- 17) ジョアナ・ストラットン、井尾祥子、当麻英子訳『パイオニア・ウーマン 女たちの西部開拓史』(講談社、2003) 69.
- 18) ジョン・E・ミラー、徳松愛子訳『ローラ・インガルス・ワイルダー伝—「大草原の小さな家」が生まれるまで』(リーベル出版、2001) 280.
- 19) Wilder (2014) 1.
- 20) *Ibid.*, 29. 35. 185など.
- 21) *Ibid.*, 30n24.
- 22) John E. Miller *Laura Ingalls Wilder's Little Town: Where History and Literature Meet* (University Press of Kansas, 1994) 42.
- 23) *BW* 84. *LP* 114, 238. *PC* 296. *LT* 176. *HGY* 274.
- 24) *PC* 296.
- 25) *HGY* 274.
- 26) “wine-colored calico, covered all over with a feathery pattern in lighter wine color” *BW* 140-41. “dark green delaine, with the little leaves that looked like strawberries scattered over it” *BW* 141-42.
- 27) Miller (1994) 54.
- 28) *Ibid.*, 55.
- 29) Wilder (2014) 264-5n90.
- 30) Miller (1994) 54-55.
- 31) 磯部孝子『現代英米児童文学評伝叢書1 ローラ・インガルス・ワイルダー』(KTC 中央出版、2004) 98.